

「大腸癌の構造」

筑波大学教授 中 村 恭 一 著

癌研附属病院長

西 満 正

日本人病理学者の快挙

数理的癌診断への挑戦 ある病変が癌か否かを初期の段階で判別することは、最も重要なことであるが、困難を伴うことが少なくない。そして、このような癌の判定は、臨床的な診断、治療、治療成績、疫学などを論ずる場合にも、基礎的な実験腫瘍の研究でもまことに重要である。

ところがその判定基準が日本中あるいは世界中で異なっているとすれば恐ろしいことであり、ばかげたロスも多いと思われる。一般に自然科学は経験や感によるパターン認識でなく、数学的表現を命題とする。著者は判定基準の客観性、共通言語としての数学的表現に長年にわたって苦闘し、多数の症例についてしっかり取り組んできた。この本はその労作の結晶である。

共通言語の創造 著者は癌判定の最も大事な基準である CAT (細胞異型) と SAT (構造異型) をもう少し動的、総合的に捉えようとした。そ

して異型度の数値変換として次の 2 つを設定している。1 つは核・細胞質比 (N/C) の数値化としての核腺管係数 (ING) であり、もう 1 つは腺管密度の数値としての乱れ係数 (ISA) である。

この ING と ISA を使って癌と腺腫の判別式 F_{ca} と、腺腫と過形成の判別式 F_{ad} を共通言語として創造している。

最終結論とその展開 大腸癌の組織発生は、今まで言われていたように大部分が腺腫から発生するのではなく、腺腫からの癌化は 20-30% であり、70-80% は de novo cancer であるというのが著者の結論である。

この結論と判別式に基づいて、大腸癌組織発生に関するバラバラな学説や文献・統計、境界領域病変、大腸腺腫症、絨毛状腫瘍、炎症性疾患などに対してもかなり明解な癌との関係についての考察を展開している。

臨床家や患者が最もお世話になっているのは臨床病理である。著者は癌研病理に御勤務の時代から 30 年

来の私の畏友であり、地味で苦勞の多い臨床病理の大道を、形態学一筋に歩いて来られた。“格物致知”の大道を歩みながらコツコツと築かれた日本人の快挙であると思う。

この本の意義 現在、日本人の大腸癌は増加しつつあり、しかも早期癌の処置にもいろいろな問題点が指摘されている。また、近年、著者の説を裏付けるような症例や統計が出はじめている。医師に不得手な哲学と数学 (自然科学では最も大事な基本である) が出発点になっているので読者にはとっつきにくい面もある。日本が蘭学の洗礼を受けて約 400 年以上、直接欧米文化が流入しはじめて約 100 年以上を経過した。ようやくユニークでしっかりしたこのような本ができたことを心から喜びたい。唐突かもしれないが、約 200 年前の杉田玄白や平賀源内を思い出す。

見事な標本写真、深い意味を秘めたイラスト、所々にロマンとユーモアの散りばめられた文章を含めて、楽しい本でもある。

著者は“霞ヶ浦”に生じた“さざなみ”と謙遜しておられるが、もし論理の進め方に誤りがなければ、まさしく日本人の快挙であると思う。反対意見の人にもゆっくり、静かに、読んでほしい本である。

B5 判 232 頁 1989 年
定価 9,991 円 送料 300 円

医学書院 刊